ほろ酔いインタビュー●佐佐木幸綱交遊録●

〈第22回〉早稲田大学教員組合委員長
一九九〇年（平成2年）～

初めてのサントリーホール、教員組合の委員長となる、断らない人生、一一一一号記念大会、「情報化社会」と「高齢化社会」、野間宏、酒と文学

2023・5・3　於・佐佐木邸

佐佐木幸綱＋黒岩剛仁・加古陽・奥田亡羊・森部信次・高山邦男＋佐佐木朋子

記録作成＝吉田瞳

▽初めてのサントリーホール

高山　年譜によりますと九〇年に「三重讃歌」の演奏会開催とありますが。

幸綱　三重テレビが開局二十周年で「何かイベントをやりたい」ということで、僕と作曲家の野田暉行さんと二人で「交響曲三重讃歌」を作ってもらいたいという話があった。僕は初めてのことなのでびっくりして、どうやっていいのかわからなかったんだが、いろいろな話を聞いて、「こんなことはもう一生に一回か二回しかないことだ」と思って、引き受けさせてもらった。

言ってみれば三重県の大きさというか、歴史の深さというか、そういうものを言葉と曲で具現化したい、ということでした。

で、半年くらい余裕があったかな。話があって、作って、それに野田さんが曲をつけてくれました。

加古　九〇年九月十四日に初演です。

幸綱　そうですね。僕は行きました。初めてのサントリーホールだった。フルオーケストラ。歌い手の人たちを入れて、四百人ぐらいが舞台に上がったんじゃないかな。

高山　それは壮観ですねえ。

幸綱　それはもう、三重テレビのメンツをかけたんだと思います。エッセイストの楠田枝里子さんが司会だった。僕も舞台に上がって……。

黒岩　作られるにあたって、鈴鹿には何回か行かれたと思いますが、「三重讃歌」だから、三重全体を讃えなくてはいけないわけで、取材とかされたんですか。

幸綱　取材はしなかったけれど、いろいろ、手立てを尽くして、調べたな。「交響曲」というので、野田さんが六つか七つ、曲を作ったんじゃないか。四百人、演奏する人と歌う人が舞台に上がり、それはもう大がかりな演奏会だった。

加古　第九をやるみたいな感じですね。

奥田　どういう歌詞ですか。

幸綱　全体は六つか七つの曲に分かれていた。今でも覚えているのが、例えば「伊勢湾の夜明け」とか。歴史的な大ドラマがあったわけじゃないから、構成はどうしても地味になっちゃうよね。それでもなんとか、四、五か月かけて、作りあげたと思う。一生に一回だからね。

作曲の野田さんが、いろいろなところで部分的にメディアに載せてくれたりしているらしい。全曲一挙演奏をぜひやりたいという話が……、まだ一回もないんだよね。

黒岩　全部演奏するのにどれくらいかかるんですか。

幸綱　一時間くらいだと思う。三重テレビでは、やってるかもしれないが、ＮＨＫではやらないから、普通の人はなかなか聴く機会がない。

高山　ということは、だれも聴いたことがないわけだ（笑）。

黒岩　創刊一三〇周年の時、それを披露してもいいのかな。

高山　アーカイブは必要だよね。

幸綱　われわれ短歌を作っている者は、短歌だけじゃなくて、言葉の芸術をもっと……。

奥田　先生の作られた詩は七五調だったり五七調だったりしたんですか。

幸綱　いや、そういう古い韻律は避けたと思う。

奥田　曲が先に出来上がって、それから歌詞ですか。

幸綱　いや。こっちが先だった。

▽作詞した校歌が十二、三

高山　それに関連した話ですが、佐佐木幸綱先生が作詞された校歌は、信綱ほどではないけれど、けっこうあるんですね。

幸綱　全部で十二、三かな。今でもわりと覚えているのは秋田の芸術大学。かなり苦労して作った記憶がある。

高山　それはインターネットで今でも聴けます。僕、聴いたことがあるんです。とてもシュールな、現代的な、前衛的な歌で、作曲が三枝成章、幸綱先生の詩もなかなかシュールな感じです。

幸綱　「芸術大学だから、古めかしくなく」と言われた記憶がある（笑）。

高山　校歌というといかめしいとか、重々しい感じだけど、そうじゃない。これを読んだ方はぜひ、調べて聴いてもらいたいと思います。

奥田　ネットで聴けるんですね。

黒岩　作るときに、歌うのが小学生なのか高校生なのかで、考えますね。小学生なのに難しい言葉を入れてもなんか…、だし。

僕は横浜の南が丘中学校に一年だけいました。その校歌が、「世界の窓　この横浜～誇りあれ南が丘中学校」と、横浜を讃えているんだが、中学一年生の気持ちにビンビン響いた、という気持ちをいまだに覚えて

いる。しかも、一年間しかいなかったのに。だから、校歌は大切だなあという気がするんです。

高山　そこで、紹介したいものがあります。「佐佐木信綱研究」に会員の間宮清夫さんが佐佐木信綱の校歌を調べて載せています。校歌も歌人の仕事の一部として、大事な仕事だと思います。先生の校歌についても間宮さんは調べています。

幸綱　校歌とか、国歌も含めて、何なのかというのがね。

奥田　ハレの歌なのか、祭祀・儀礼の雑歌なのか。個人的な歌ではないことは確かです。

黒岩　青春の一ページを彩っているわけだよ、校歌は。でも僕は高校一年生のとき、都立墨田川高校に入って、二年で転校したから、大阪府立茨木高校の校歌って知らないんだ。入学すると、音楽の先生から、最初の何週間で教えられるんだけれど、二年から転校していくと、教えられるきっかけは全然。しかも、校歌を歌うきっかけは、始業式、終業式なんだけど、茨木の市民グラウンドで野球をやったりしてたから、校歌を一回も聞いてないわけ。そうすると、同窓会とかに参加して、みんな、嬉しそうに校歌を歌うんだけれど、「その校歌、知らないんだよねェ」みたいな。でも、校歌って大切だと思う。

▽教員組合の委員長となる

高山　先生は九〇年十月早稲田大学の教員組合委員長になられています。歌人だけでも大変ですが、教員としても大変で、それプラス組合ですから、二刀流ではなく、三刀流です。間違いなく忙しかったと思います。

幸綱　学校に勤めて、十年以上して、ある程度の年齢になると、学校の役員、つまり学部長、学長を頂点とする学校運営の役員をやるか、あるいは組合の役員をやるか、うーん、どっちか……、いろいろ考えて、しょうがないなあということで、「じゃ、教員組合のことをやりましょう」ということで話がついた。早稲田は全学部で大体、千人くらい教員がいる。職員が二千人くらいいるかな。やらなくちゃいけないというので、その教員組合の委員長をやってね。俺の後はラグビー日本代表監督を務めた日比野弘君。彼が俺の後の委員長になった。

　これが結構、大変で。組合員は千人くらいだが、ある意味でちゃんとしていて、前の年から予行演習みたいで、月に何回かは会合に出なくちゃいけない。実際、委員長になっても、一週間に二回くらいは何か会議があって、出る。遅い日は授業の後の七時頃から始まって、十時過ぎまでだったり、かなり大変だった。

　就任する一年前から合宿までやらされる。だから、前の執行委員と次の執行委員とは知り合いになるわけだね。

奥田　合宿って、何のためですか。

幸綱　まあ、こっちは何も知らないわけだから、組合のことはね。手続きの方法から、歴史みたいなことを一応知っておくぐらいまで、学習させられるわけだ、

黒岩　今、何が課題になっているのか、そ

ういうのを引き継ぐんじゃない？

奥田　団交の仕方を伝授するとか？

幸綱　ただ、団交の相手は学長とか学部長という人だから、よく知ってる人もいるわけだ。だから、そんなにとんがってどうってことはないんだけれど。

奥田　でも、先生はそのとき団交して、経営陣と交渉をするということをされていた？

幸綱　そう、もちろん。今年のボーナスはいくら、ベースアップはいくらとか……。当時の私立大学の教員組合では、早稲田が基本になっていた。だから、俺たちだけの話じゃなくて、責任が……。

黒岩　全国の私大でみたいな？

幸綱　早稲田が妥結すると、その線でみんな妥結するわけ。だから、自分たちだけの問題じゃなくて、他の責任もあるということ。

森部　当時はバブルが崩壊した直後でしょう。

幸綱　そう。九〇年代。

森部　それまでなら右肩上がりで昇給を決めておけばいいけど、もうそうはいかない時期ですよね。

黒岩　ちなみに、任期は何年だったんですか。

幸綱　一年。一年間だけは一生懸命やれと。

黒岩　先生が一年間やられたなかで、「早稲田の教員組合の委員長をやって、これが成果だったなあ」みたいなのがありますでしょうか。「ここは勝ち取ったぜ」みたいな。

幸綱　無事に仕遂げた、くらいだ（笑）。まあ、所沢キャンパスをはじめ、いくつか新しい校舎や合宿所なんか見に行った記憶はあるな。

▽やってよかったこと

高山　お話を伺っていると忙しくて大変だったと思うのですが、自分にとって「やってよかったこと」ってありますか。

黒岩　いい質問だねえ（笑）。

幸綱　ふだんと違う知り合い、友だちができたことだろうね。合宿をやったりしたからね。学部が違う、それまで付き合いがなかった人と出会ったり、今でも友だちの人が少しいますが、甘っちょろいといえば甘っちょろいけど、そういう人間関係ができたよね。

森部　後任の日比野先生も見習いで参加されたわけですね。

幸綱　見習いから次の時代まで、三年間くらいね。結構、大変だ。

森部　九〇年前後の早稲田のラグビー部はけっこう黄金時代です。堀越、今泉、郷田、増保とかが活躍した。

黒岩　いやいや。今泉は僕が学生のころでしたから、八〇年代で……。

森部　ええ、明治のラグビー部は吉田義人が活躍した時代で、九〇年冬の早明戦は語り草です。

黒岩　僕のときは本城だった。

森部　日比野先生とは日頃の接点はないでしょうから、まさに異文化交流ですね。

幸綱　個人史の中ではちょっと不思議な時代だったね。

加古　当時のことは歌にもなりましたね。

〈早稲田大学教員組合委員長佐佐木幸綱君

の挨拶〉(『瀧の時間』)

幸綱　やはり忙しかったんだと思う。ひらがなは一字で、あと全部、漢字だもんね。感情や感覚をいじる暇がなかったんだと思うな。

黒岩　因果関係があるのかどうかはわかりませんが、教員組合の委員長としてご苦労をされたから、「じゃ、オランダにどうぞ」って、それは関係ないんですか。

幸綱　因果関係はないと思うね。

▽忙しかった、でも、歌はやめない

高山　先生は楽しそうな感じで振り返られているので、意外と楽しかったのかな!?

幸綱　今となってはもう、あまり起伏のない人生の中で結構……(笑)。

黒岩　それは幸綱先生の人柄だと思うよ。同じ体験をしても、「教員組合の委員長をやって大変だった」と言う人と、「いや、でも、こんなつきあいができてよかったよ」と言う人と、先生は前向きに捉える人だと思うので。

高山　楽しそうだなと。

黒岩　いや、そもそも先生は人生が楽しそうじゃないか。

高山　まあ、確かに。

黒岩　〈早稲田大学教員組合委員長佐佐木幸綱君の挨拶〉。

森部　そうした組合委員長時代は『瀧の時間』に詠まれているので、にわか勉強で読んできました。後記に「日々の生活の中で出あう人や物や事に題材をうる」とありますが、それが、僕にはすごく読みやすい。

幸綱　それ以外、ない。他に、何も出てくることができないような、忙しさ。

森部　日記のように日付やメモまで入っている。さきほどラグビーの話が出ましたが、一九九〇・一〇の日付で〈スワーヴを切ってウイング透明な壁に当れるとき発光す〉という歌を読むと、主語がなくても明治のウイングの吉田義人が浮かびます。

幸綱　なるほど、なるほど。

森部　吉田は稲妻のように外にステップを切ってタックラーを躱していく…。

高山　いいねえ。森部さんらしい読みだ。

森部　早稲田の郷田とか今泉は、猪突猛進型で、まっすぐ突っ込むしかない。

高山　ま、今泉はフルバックだから、いちばん最後尾にいるわけで。

森部　固有名詞がなくたって分かる歌というのはやはりすごい。

加古　記録するために、森部さんがおっしゃった『瀧の時間』の後記を読みます。

「この時期、私は、主題を追って作歌するのではなく、日々の生活の中で出あう人や物や事に題材をうる、という作り方で多くの歌を作った。(中略)いわば〈待ち〉の作歌法である。／これまで私は、主題を軸にしての〈狩〉の作歌を中心にしてきたように思う」。こう書いておられます。

幸綱　うーん。本当はわからんけど、今言ったように忙しかったんだよね。だから、待つことなくて、もう全部あったという感じ。五十代ですかねえ。本当に忙しかった。で、組合だけじゃなくて、授業もあったし。「心の花」もその時期、ちゃんと書いてるだろう(笑)。

奥田　先生が「心の花」に書き継がれてきた「短歌の現在」も、現代短歌史のとても重要な資料なんです。

高山　すばらしい。

▽断らない人生

黒岩　今の話を聞いていて思ったのは、幸綱先生の「忙しい」ということに関する理解力というか。僕も、会社ですごく忙しいとき、何回か欠詠をしたことがあって、「遅れてすみません」とか「欠詠してすみません」というメールを送ったりすると、お返事は「いいじゃないか。忙しいというのはそれだけ世の中から必要とされていることなんだから。短歌はべつに何か月か遅れて、人が死ぬわけでもないし」と。ああ、先生の素敵な言葉だなと思ったんだが、そ

れは多分、ご自分もそういうことを思っていらっしゃるんだなと。

高山　前回の話にも出ましたが、とりあえず「断らない」。来ちゃったら、「しょうがないな、やるしかない」と。

幸綱　最近は、ずいぶん断っているけどね（笑）。

黒岩　本阿弥書店の奥田さんが「先生に巻頭三十首をお願いしたら、二十首でいいかな」と言われたとかって。

高山　だから、「心の花」の基本精神としては、若い人は断らずにやる、と。何でも頑張ってやる、という感じでどうですか。

黒岩　というか、断らないとか何とかということもそうだけれど、僕が言っているのはちょっとニュアンスが違って、忙しくて、短歌に割く時間が少ないとかということに関して、普通なら、「お前、短歌に関してはそのくらいしか思ってないのか」という話になるんだけれど、先生はそうじゃなくて、「いや、忙しいということは、世の中から、他の世界から必要とされているんじゃないか。それは結構なことじゃないか」という捉え方がとてもいいなと。

高山　それは黒岩に対する先生の優しさだと思うよ。

黒岩　そうかな。

幸綱　黒岩の話は別として、短歌というのが、いろいろな仕事がいっぱいあって、そのなかで全面的にやりたいことなのか。それとも断って、やってくることなのか。それとも、短歌のほうを減らしてやっていくことなのか。みんな、それぞれ思うところを抱えていると思うよ、忙しい人はね。

黒岩　「忙しい中に身を委ねることで、また短歌にも新たな世界が生まれたり、それも題材になったりするんじゃないか」とすごく前向きに捉えていらっしゃるような気がして。それもいい経験じゃないか。

だから、奥田君がＮＨＫを辞めた時、先生はすごく悔しそうに「ああ、もったいないことをしたね、奥田君は」とおっしゃった。奥田君はある種の決断をしたんだと思うけれど、でも、それも堪えてやっていることによって、奥田短歌がまた違う世界を見せたかもしれないという思いがあったんじゃないかな。

奥田　でも、仕事はやめたって何も変わらないです。仕事をずーっとやり続けなきゃいけないのは同じなんです。「やめる」ということはありえない。

『瀧の時間』についてはもう一回、次の会で話をしましょう。

▽一回、やめようと思ったことがある

加古　一一一一号までは話しましょう。

黒岩　一一一一号というのはいいよね。一が四つ並ぶから、記念号にしようよというのは「心の花」っぽいところがあって。

加古　一一〇〇号は特に特集を組まなかったんですね。

黒岩　そうだね。

幸綱　小紋君のいちばんのピークの仕事は、さっきも言ったように、九九九、一〇〇〇、一〇〇一と三冊、特集をしたということ。今でも残っているね。

奥田　三十代ですからね、小紋さんは。

加古　一一〇〇号は通常号と同じような編

集で、その前後では一一一号がメインです。それは何か意図があったのですか。

幸綱　多分、その時、その場の状況だと思う。

高山　場の状況を、小紋さんが何となく汲み取って全部、仕切ったんじゃないの。

黒岩　いや、違う。一一一号は小紋さんはあまり関係ないよ。私が中心になってやらせて頂いたので。

　というのは、一一一号って、一千号を超えてないとできないわけ。しかも、一一一号って、ある種、胸を張ってできるというか。しかもぞろ目で何だかおめでたい。一〇〇〇号も一一〇〇号も超えてる「心の花」だから、できるというので、ある意味、後付けというか。それが近づいてきたときに先生とお話ししてて、「これ、何かやりましょうか」という話になって、「現代短歌二十一のキーワード」とか。それは多分、後付けだけど、「心の花」しかできないわけですよね、と…。

加古　先生が一一一号の少し前に「一回辞めようと思ったことがある」と書かれていますが、そんなことがあったんですか。

幸綱　うーん。「心の花」をやめてもいいじゃないかというのは何度か思ったよね。廃刊にすると、面倒臭いことは納入済みの会費をどう清算して、どう返却するか。考えただけでも面倒くさそうだ。今でもそれは思ってます（笑）。

黒岩　治綱先生が亡くなって、お母さんの由幾先生が一人で仕切っていたころがあるね。雑誌自体も七十ページくらいで、薄いものだった。だけど、校正とか全部、由幾先生がひとりでやってらしたわけで、お母さんの大変な姿を見て、「もういいんじゃない？」って思われた部分もあったのかなと思ったり。

加古　幸綱先生が書いているのは、その当時ではなくだいぶ後のことです。

森部　七四年からですね。

奥田　先生は七四年に、三十五歳で編集長になっています。

加古　もっと言えば、一一〇〇号の前あたりで、やめようと思われた時期もあるようです。

幸綱　おふくろが「心の花」を一人でやっている時期は、ほぼ全く一人でやってたからね。当時の編集委員は、選歌しかやらなかった。たいへんな割り付けとか、校正はおふくろが一人でやっていた。実際は一月遅れで出たり、遅刊がつづいたり、いろいろなことがあった。あの時期、消滅する可能性があったんだよね。でも、編集委員の人とか、おふくろが、消滅させるのはなんとか回避しよう、とがんばった。それは見てたから、やめるならきちんとやめる。「消滅する」形は選ばないほうがいいと考えたんだと思う。

加古　一一一号はまたこれから、もっとやっていこう、一から始めようという意図があったのですか。

幸綱　具体的にはわかりません。

黒岩　そこまで大袈裟なものじゃないと思うけれど、でも、一一〇〇号をやったら、次は一二〇〇号という思いがあるからね。

幸綱　まあ、誰かの思い付きじゃ弱いので。で、周辺の人に支持されないと、と思

いますね。

▽一一一一号記念大会

高山　そこで、先生がお書きになっている、何年か前のキーワードと、この特集の「現代短歌のキーワード」について触れていきましょう。

黒岩　でも、一一一一号って、わりとマスコミにも取り上げられたりして。

高山　このキーワードは今でも通用するもので今に繋がる認識もあり、本当に勉強になります。

森部　記念大会はどこで行ったのですか。

黒岩　サンケイホールでやったんだね。

幸綱　よく覚えているなあ。

黒岩　あのサンケイホールが、ホールとは名ばかりで、大会議室みたいな感じで、真ん中辺に柱があったり、古いビルですから、けっこう使い勝手が悪くて、柱の後に座っている人からは「舞台が見えません」と言われたり。

幸綱　若い人用だったんじゃないか。案内状を出すとか、招待状を出すとか。それまではいろいろな結社の偉い人を呼んでたけど、「若い奴を呼ぼうよ」という、そんな空気があったんじゃないかな。

森部　「短歌の未来」とは、まさに、そういうものを反映しているわけですね。

幸綱　安い会場を借りて。

加古　一一一一号記念大会の鼎談は、幸綱先生と篠弘さんと髙野公彦さん、石川不二子さんでした。篠さんが「中間短歌」という話をされていて、興味深く読みました。短歌は明治時代の終わりから「明星」の持っていた大衆性、恋の遊びの要素を失って純粋短歌、本格短歌、つまり純文学で来てしまった。でも、寺山修司とか中城ふみ子、俵万智さんのように中間小説としての側面がもっと必要なんじゃないか、という議論です。いま読んでも面白い鼎談でした。

奥田　ライトヴァースの後ですから。歌壇が変わった時期なんです。

幸綱　そういう空気があったんだね。権威主義みたいなのが歌壇にはどうしても出てくる。権威主義に対するアンチの空気がほしかったんだね。

加古　芥川賞が上で、直木賞が下というわけじゃないでしょ、という譬えもされている。つまり「短歌は芥川賞的な世界を目指し過ぎたために幅広い大衆の支持を失ってしまい、読者が少なくなった。だから、もっと直木賞を目指せ」という主張です。

　それから参加者の感想を読むと、翌日の「短歌裁判」が面白かったという人が多いのですが、「短歌裁判」って何ですか。

黒岩　「短歌裁判」か、よく覚えてないなあ。しかし、かすかに…。

加古　「心の花」に収録されてないんです。だから、何の話だかわからない。

高山　覚えている人の記憶しかない。誰も覚えてなかったら、しようがないけど。

黒岩　なかったことになっちゃう。

朋子　その場の面白さと違うんですよ。

高山　なるほど、その場の面白さなわけですね。

朋子　やはり参加しやすかったんじゃないですか、会場の人が。

黒岩　確かに、そのころは全国大会とかで、谷岡が原稿を書いた「偽ハムレット」をやったり。全国大会の後、出し物みたいな…。

高山　そういう意味で、若かったわけだよ。ぼくは参加してなかったけど、みんな若くて、やってて、奥田君だって若かったし。

奥田　若かったどころか、生まれてもいません。ウソです（笑）。

高山　そういう意味では「心の花」は老齢化しているぞ。いまだに俺たちがやってるのはよくない。

奥田　年代の開きがないとまずいですよ。

黒岩　ただ、それは「牧水甲子園」とかの原型になったかもしれないよね。

高山　そろそろ中身の話に行こう。

▽「情報化社会」と「高齢化社会」

奥田　歌壇の雰囲気や歌のテーマが変わった。それが今にもつながっているという話ですね。

高山　何年か前の企画と比較して、先生が書かれているわけです。

奥田　キーワードとしてあがっているのが「情報化社会」とか「高齢化社会」とかですね。

黒岩　あえて「スピード」などを入れて、明治以降の短歌の世界を敷衍して…、スピードって、鉄道や郵便が始まって、変わったでしょう。ファッションとか。明治以降の短歌の世界で着目して、テーマにすると面白いと思うものをあえて挙げたつもりです。しかも書き手が、塚本さん、岡井さん…。

高山　これは今でもものすごく通用している大事なテーマであり、みんながやっていることだ。それで、先生はこれをどう思われているか、ですが。

黒岩　もう一つだけ、言っておくと、原案は僕が作らせてもらったので、外部の人への依頼も僕がさせてもらったんだよね。それは、岡井さんとかからすると、「黒岩なんて若造から依頼が来たけれど…」ということでしょうが、「心の花」という看板を背負っているからお願いできるわけで、快く書いていただいたし、こういうのをきっかけに編集部が代替わりしていくというか、結構、大切なタイミングだったような気がするんだけど。

高山　あと、それ、谷岡が書いた本『佐佐木幸綱』につながっていくわけですね。ほぼテーマに沿って書かれているわけで。

奥田　そうですね。六〇年代とか七〇年代のテーマ、前衛短歌なども引き継ぎつつ、家族だとか中年だとか、新しいテーマが出てきてますね。

高山　今までなかったわけで、このへんのことを、先生にお話ししていただきましょう。

幸綱　五年に一回くらい、現代短歌のキーワードをみなが考えるのがいいんじゃないかな。「俺のキーワード」をみんな出す。そういう企画はどうだろう。

黒岩　僕はこれ、経験させてもらって、「二十一のキーワード」を選んで、先生にプレゼンテーションをしたとき、「スピードというのがよくわからん。これは本当に意味があるのか」と言われて、「僕はどうしても残したいので、場合によっては自分で書きます。なぜなら、明治以降いちばん変わったのがスピードじゃないですか。鉄道が通るようになったりして…。だから、これは残したいんです」と言ったら、「君が書くなら残していいけど」ということで。若い世代と幸綱先生とがぶつかって何か企画を通すのがとても大切な気がします。

幸綱　それから何年か経って、スピードのいい歌があるとよかったね。

黒岩　そう、それなんですけどね（苦笑）。

▽AIは人間にかなわない

幸綱　逆に言うと、恒例の行事みたいにして、「十年に一回」で、三世代か四世代、「今年のキーワード」みたいにして積み重ねて

いったら面白い。

高山　記念号のたびにやる。

幸綱　いいアイディアだね。

加古　「情報化社会」というキーワードで篠弘さんが未来予測をしています。篠さんは、二十一世紀には文学のデータバンクと、それと結び付いた付加価値通信網が整備され、研究論文を書くために必要な資料がスムーズに集まってくると書いていて、いままさにその通りになっています。ただ「作歌のようなきわめて孤立した作業には、やはり国語辞典を繰りつづけるのが相応しい」とも書いてある。やっぱり辞書を作る側にいた人だな（笑）。

幸綱　国語辞典を何十年と使っている人がいるけれど、篠さんみたいな……。

森部　未来予測でいうと、情報社会は急速に進んでいます。例えば、オセロがコンピューターに勝てなくなった。次にチェスが勝てなくなって、将棋ももはや勝てない。藤井聡太八冠の強さは、将棋におけるＡＩ研究の先頭にいるということですね。今後、ＡＩで短歌を作るとなってくると…。

幸綱　一首だったら、コンピューターにいい歌ができる。ただ、歌集になったら違うし、一生だったらもっとちがう。五十年でも、八十年でも。その人の歌のトータルだったら人間にかなわないだろうと思う。

黒岩　しかも、イメージで作った百首、二百首とかを選べなきゃいけない。全部がいい歌じゃないわけだから、これはいいよね、これはだめだよねって、それは結局、今、人間が判断するわけで…。

　一瞬のうちに百首とか三百首とかできたりするんだが、ＡＩが「これがいいですね」とか「これはおすすめです」とか選ぶわけじゃないので…。

加古　そう、まだ選ぶことはできない。

幸綱　新聞投稿歌みたいな、一首だけならＡＩで十分、できる。

▽野間宏

加古　このころに先生とお付き合いがあった作家や画家が亡くなっています。作家では野間宏さんが九一年一月二日に亡くなっています。野間さんとはかなり濃密なお付き合いをされたそうですが。

幸綱　河出書房の縁で、何度もお宅へ伺ったし、奥様もよく存じ上げていました。河出書房では野間さんの担当の田辺園子さんという女性がいて、彼女が野間さんと一番親しかったですね。野間さんは重厚な真面目な、重ーい、暗いものばかり書かれてましたが、けっこう茶目っ気のある方でしたね、「雑誌『文藝』で、匿名のページを一ページでいいからやらせてくれないか」と言われていました。不思議なアイディア、可笑しなアイディアをお持ちだったようでした。当時の小説の感想とか、当時の事件に関するいろいろな感想とか、野間弘を離れてのアイディアを、飲んでいるときにいろいろ聞かせてもらいました……。結局、実現しなかったですけどね。

森部　当時、東京新聞の匿名文壇ゴシップ欄「大波小波」が人気でしたね。

黒岩　野間さんって、狭山事件の人だよね。へー、意外な一面ですね。

幸綱　重々しい人と思われたけどね。重々しい、を離れた、もっと自由な自分を持てたらいいなというアイディアがあったみたいだった。

加古　先生が書かれた野間さんの話でいちばん衝撃的だったのは、ポルノ小説の話です。酒を飲んでいるときに野間さんから一度だけ「ほんもののポルノ小説を書いてみたい」と言われたことがあるとか。

幸綱　野間さんの文章はねちっこいんだよね。あの文体でエロものを書けば、ものすごいねちっこいものになったと思う。でも、実現しなかった。ただ、そういう興味はかなりあったみたいだったな。

　時代が違うからあれだけど、僕が編集者やっていた時代には、この人は商売としての小説家以外、他のことはやれないだろう

という人がたくさんいた時代です（笑）。今はみんな器用だから、いろいろなことができると思うけど。野間さんは、小説家以外にはならないし、なれないと思わせるような人だった。

森部　先生がおつきあいがあった福永武彦はミステリーも書いてますね。

幸綱　息子さんが池澤夏樹ですね。福永さんも、小説家っぽかったな。お宅が成城だったんでよくうかがった。編集者になって、最初に作った単行本が、福永さんの『孤独』という小説だった。装丁は駒井哲郎さん。

加古　九一年一月二十九日には、井上靖が亡くなっています。井上さんは、詩歌文学館賞授賞式の賞状の渡し役でしたね。

幸綱　ご家族とも会ったし、お宅へも何度か伺っています。

　びっくりしたのは、井上さんの御宅に伺うと本棚があって、そこの本は今書いている小説のために集めた本ばかりだったことですね。一つの小説のために百冊以上集めて、それらを読まれたらしかった。そういう本棚が二つあったのを実際に見ました。ものすごく勉強をされる方なんだ、と。僕が二十代で、向こうは六十歳くらいだったと思います。本当に丁寧な対応をしてくださった。いい方でした。

　大衆文学的な純文学で、でも、厳密なことをやっておられる方なんだなという印象でした。

森部　ノーベル文学賞の候補になったこともあります。

幸綱　あ、思い出した。ノーベル賞をもらうかもしれないので、選考会の当日、お宅に新聞記者や雑誌編集者が集まっているところに行ったことがある。今の俺より若かったとおもうけど、当時の俺から見ると、ノーベル賞の報告待ちにしては、さばさばとしておられた。

加古　二月五日には画家の中川一政さんが亡くなっています。

幸綱　有名な洋画家ですね。最初は河出書房社員として伺ったんだけど、いい方で、若い人が好きだったのかもしれないけれど、ずいぶん丁寧にしてもらいました。真鶴だったかな、海を見下ろす断崖の上のお宅だった。すごいんだよねー、崖の上に建っていて。向うがバーッと見晴らせた。

森部　真鶴半島の先っぽにある記念美術館にはいきました。

黒岩　サッカーの岡田監督の家みたいだ。岡田監督の家も崖の上で、海が見えるらしい。

加古　対談後、色紙に署名した話をぜひ。

幸綱　そこの御宅だったと思うけど、ある婦人雑誌の対談をした。先生と対談するんで緊張してたんだけど、気さくな方で、対談はうまくいきました。ご馳走になったんだと思うけれど、その後、雑誌の企画で色紙に二人で名前を書いてくれというんだね。先生が先に名前を書かれた。ものすごくゆっくり書くんでびっくりした。中川一政という署名だけど、画数が少ない。それを、色紙の半分より下に小さい字で書く。俺は字がデカいじゃないか。それに五文字もある。ものすごく緊張した。先生より大きい字は失礼だと思ったから（笑）。

黒岩　それはいい話ですねえ。でも、その色紙、見たいですよね～（笑）。

幸綱　今でも覚えている話は、山を描くとき、見上げては描きたくない。山と同じ高さのところに登って行って、描く。山と対等の高さで向き合うというんだね。だから、富士山は描かない。描けないわけだ。

　中川先生には、そんな、いい話がいっぱいあって……（笑）。

黒岩　それで言えば、先生が大変だった対談として、マラソンの宗監督、「彼は走ることしか興味がないから、対談が成り立たないんだよね」って（笑）。

幸綱　わざわざ宮崎県の延岡にある旭化成まで行って……（笑）。これだけ長く生きて来ると、結構、変な人とたくさん会ってるわけだ。

僕の編集者時代で、楽しく、ずーっと長い時間酒をいっしょに飲んだ大先輩は、武田泰淳と野間宏だね。野間さんは量はあまりお飲みにならなかったと思うけど、泰淳さんはずいぶん長い時間飲んだ。ビールばっかりだったけど、六時間、七時間はずっと飲んでおられた。だから泰淳さんのお宅に伺った日は会社に行かない。行けないわけだね。

こちらが二十代の終わりで、向こうは五十代だったと思います。同じ時代の問題を共有したわけじゃないから、向こうが喋りたいことをしゃべる感じなんだよね。若い者に酒飲み話を聞いてもらう嬉しさみたいなものがあったんだと思うね。

文学史的に言うと、第一次戦後派という人たちだね、今の二人は。その後に「第三の新人」がいた。吉行淳之介さん以外、あまり気が合わない人がずいぶんいた（笑）。

▽酒と文学

高山　今日も先生からお酒にまつわるお話をたくさん伺いましたが、お酒はすごく大事なコミュニケーションじゃないかなあ。

黒岩　そうだよ。コミュニケーションツール。

幸綱　酒と文学が親しい時代だった。文壇バーみたいな店が何軒かあったもの。今とは全然違うだろう。

高山　若干、そういう傾向がありますけど。

幸綱　若干じゃなくてさ。「全然違う」だろう。

黒岩　だって、会社がそうですよ。飲みに行くことによってつながりができたが。今は新入社員研修の時、指導する人たちに会社からメールが来るのは「一次会へ行ってもいいけど、八時に解散してください。その後、二次会には行かないでください」みたいな、結構、面倒くさい…。

高山　そういう意味では、この「ほろ酔いインタビュー」はすごい希少価値じゃないですか。

幸綱　小紋君がそうだったけど、彼なんかが酒の時代の終わりの時代の人だね。昔、牧水・白秋は典型的な酒飲みだったらしい。明治十年代生まれだね。彼らには酒を飲むことが「俺は文学をやってんだ」という意識のベースにあったらしい。その時代の最後くらいが今、話に出た時代なんだと思う。今は村上春樹をはじめ、酒を飲まない。「編集者と書き手が一緒に酒を飲むなんて、冗談じゃないや」というか、「そんなことはあり得ない」みたいなのが現実らしい。時代が変わったんだ。

黒岩　今日はまた、男ばかりが集まって喋っているページを見て、誰かに、「またオッサンたちが集まってやってるわけね～」と言われるだろうなあ（笑）。

森部　二〇一一年入会なので、九〇年代の幸綱先生のことを全く知らないで来ました。こんな楽しい話を伺える場所だとは思いませんでした。次回の予定は九二年から九五年が対象ですが、当時を知らない人でも楽しめるインタビューですから、いろいろな人に立ち会ってもらうといいと思います。

高山　そうですね。今回はたまたま都合が付かず女性がいませんでした。昔から、「心の花」は若干、女性が弱いと言われたこともあり、次回は。

黒岩　いや、逆に昔、信綱先生のころは女性の天下だったわけで。

高山　今回もかなり酔ってきたみたいです。とてもいい話がいっぱい出ました。これで終わります。